
最強の名探偵

万寿堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の名探偵

【Nコード】

N8194F

【作者名】

万寿堂

【あらすじ】

組織を壊滅させた。でも、コナンを案じた優作が組織を追い込み壊滅させた。更に、何度も守ると言っていた哀を守りきれず、哀は銃で撃たれ、一生もののキズを負わせてしまう。それに対し、コナンは自分の府外なさに、家族とともにロスに行き、探偵として進歩するため、優作に指導してもらおうのである。あれから4年…

プロローグ（前書き）

初作品です。

コ哀です。

基本は中・高生を書きます。

下手ですから、文句言わないでくださいね。

プロローグ

やあ、みんな！俺の名前は江戸川コナン。本名は、工藤新一。俺がAPTX4869で小さくなってからもう4年がたった。

そして、FBIや父さん、服部の力を借りて、ついに組織を壊滅させることに成功した。

組織を壊滅させたのは嬉しいけど…結局、壊滅させたのは父さんだっただ。

しかも…あれだけ灰原を守ってやるって言うっておきながら、灰原は銃で撃たれ、一生ものの傷を負わせてしまった。

コナンは、自分の府外なさにショックを受け、探偵として進歩するために、優作に推理の指導を求めて、ロスに行くことを決意する。

決意した次の日

阿笠宅

コナンは地下室に下り、ノックもせずに扉を開ける。

「はいばらぁー、博士は？」

「工藤君あなたねえ、ノックをしると何度言ったら分かるのかしら？」

ジトーンとした目でコナンを見る。

「わりい、わりい」
苦笑いしながら言う。

「博士なら学会があるって、さっき出かけたけど」

「ちようどいいや」

「ちようどいいって何が？」

不思議そうな顔でコナンを見る。

「いや・・・その・・・／＼／＼」

少し頬を紅く染める。

哀は頭に？を浮かべる。

「／＼・・・あのさぁ・・・お前に言っとかなきゃいけないことがあ
るんだけど・・・」

俯いて言う。

哀は何？と返す。

「・・・俺さ・・・3日後・・・父さん達とアメリカに行くよ。それで、父さん
に探偵として一からいろいろ教わりたいんだ。」

哀は一瞬、え？と悲しくなり、行ってほしくないと思ったが、きつ
と組織を壊滅させたときのことを悔やんでいるのだろうと思い、話
の続きを聞く。

「あれだけ、お前を守ってやるって言うっておきながら、守りきれな
かった。それが悔しくてさ・・・」

「・・・工藤君が気にやむことじゃないわよ！・・・私が勝手にあなたの前
に飛び出したんだから！」

少し声をあげて言う。

「そうだとしても、守れなかったのは事実だろ？だから、今のままじゃダメなんだよ…」

哀は俯いて黙ってしまった。行かないでと強く思いながらも言えずに

少し沈黙が続く中

コナンがボソッと言う。

「…好きだ…」

「!？」

僅かに聞こえた声

確かに『好き』と聞こえた。

「俺…お前のこと好き

「何言ってるのよ！あなたは蘭さんが好きはずでしょ？」

驚いた。ずっと片思いだと思っていたコナンからこんなこと言われるとは思ってもいなかった。

「蘭のことも好きさ…幼馴染として…でも、本当に好きなのは灰原なんだ。」

あまりにも真剣な目を見て、本当に思ってくれていることを悟り涙が溢れてくる。

「…ら…さん…はど…するの？」涙を流しながら聞く。

「蘭にはちゃんとすべてを話すよ。灰原もそれで良いよな？」

コナンは、哀の顔を胸に当てながら言う。

哀は、微かに頷く。そして、咳く。

「わ……た……もずつ……と……好きだ……た……」
泣きながらも笑顔を見せて言う。コナンはそれを聞いて、哀を抱き締める。

「／／ずっと、待ってるから……貴方が帰ってくるの……／／」
顔を真っ赤にしながら言う。そして、唇を重ねる。

「ああ」

3日後

蘭には、すべてを話し納得してもらい、博士や服部、探偵団などにはアメリカに行くことを伝え、コナンは旅立って行った。

第1話：工藤コナン

コナンがアメリカに旅立って4年

探偵団と哀は帝丹中学1年生になっていた。

学校

「おはよう！哀ちゃん」

「おはようございます、灰原さん」

「おう、灰原」

今日も、朝から元気な探偵団の3人が、哀が教室に入るとあいさつしてきた。クラスはみんな同じのようだ。

「おはよう」

組織が壊滅してから、哀は少し明るくなったため、微笑を浮かべて3人にあいさつを返す。そんな哀に教室にいる男子がみんな見惚れる。

それもそのはず、哀は容姿端麗、頭脳明晰、ハーフということもありスタイルもよく、特徴的な茶髪、大人びた雰囲気により魅力を引き立てている。そして、あまり表には出さないが、ときどき優しい面を見せる。入学当初から学年を問わず、男子の憧れの的なのである。大半の女子からも人気があるが、中には嫌っているものもいる。この時期になっても告白する人は絶えず、他校から来る生徒もいる。本人は、全く興味ないといった感じで冷たく断っている。どんなに

人気のある生徒が告白しても断るため

「付き合ってる人いるのかな？」

「でも、そんなところ見たことないよね」などという会話がよくされている。哀ともっとも仲良くしている歩美のもとにみんな聞きに来るが、哀に口止めされているため公言していない。

哀が席に着き荷物を整理し、一枚の紙を取り出す。

「哀ちゃん、それなに？」

「クスクス。教えてほしい？きつと驚くわよ。」

3人とも頭に？を浮かべつつ、興味深々といった感じの目で愛を見る。

「これはアメリカの新聞記事のコピーよ。朝パソコンで印刷したの。博士と見つけて驚いたわ。」

「勿体ぶらずに内容を教えてくださいよ。」

「そつだぞ！灰原」急かすように言う。歩美もうんうんと頷く。

「はいはい、わかったわよ。」

呆れた口調で言い、内容を話し始める。

「ここには工藤君のことが書いてあるのよ。それも、事件を解決したらしいわ。」

哀が言うところとも驚いて目を見開き、少し固まると興奮して内容を聞きはじめた。

哀は反応を確認すると微笑んで内容を読み始めた。内容はこうだった。

『またもや工藤優作の息子の中学生探偵、工藤コナンが事件解決！今回は麻薬を密輸・売買していたL・A・最大のギャングチームブルースコーピオンズ 壊滅。ブルースコーピオンズは……一週間前の俳優のジャック・ニコラス氏殺害事件に続いて新聞を賑わしている。ここ最近での活躍でファンも急激に増加しているようだ。今回やつと息子についての優作氏のコメントをとることができた。優作氏は

「もう、あいつに教えることはない。ついに私は超えられてしまった。」とコメントしてくれました。今後も彼に期待しましょう。』
内容を話し終えた哀が

「アメリカでそんなに有名になって、いつになったら帰って来るのかしら……」

少し悲しそうにボソツと言ったが、内容を聞き終えた3人は、興奮して大騒ぎしていて誰も哀の様子には気付いていない。哀はそんな3人を見て俯いて溜息を吐くが、顔をあげると親が子を見るように微笑んだ。

その後、3人が友達に自慢したのは言うまでもない。これが3月のはじめのことであった。

第2話：帰国

帝丹中学は春休みに入っていた。

この日、哀と歩美は、駅に服などを買いに来ていた。
擦れ違う人々は皆、哀を見て口々に

「可愛い〜」

「スゲー美人」など言っている。歩美も学年No.2と言われるほど可愛いが、さすがに哀には勝てない。

そんな中買物物をすませ、お昼と一緒に食べたあと、2人が帰っているところ5人組の男に声をかけられた。

「ねえねえ、君達可愛いね。俺達と遊ばない？」

ダボダボのスポンを履き、髪は金髪や茶髪で如何にも不良とわかるような男達。

「結構です。私達帰るところなので。」

全く躊躇することなく、冷たく言う。歩美は少し怯えつつも頷く。
それでも、構わず誘って来る。

「そんなこと言わずにさ、全部奢るから。」

などと言つが、当然の如く2人は意志を変えるつもりはなく、哀が冷たい視線を向ける。

「あなた達みたいな人と関わっている暇はないし、あなた達みたいな人嫌いだから、そこ退いて！」

哀がそう言つと、歩美は哀の袖を掴んで、

「それは言い過ぎだよ」と怯えて言つ。

哀の言葉にキレた5人は、2人を引っ張って路地裏に連れて行く。

2人は抵抗するが手を縛られる。哀は、ヤバいとか思いつつも歩美を心配している。歩美は恐怖で泣いている。哀は必死に抵抗し、せめて歩美だけでも逃がそうと考えるが、うまくいかない。男達が服を脱がすため、哀と歩美の服のボタンを外しはじめたそのとき

「Well, well. What are you doing?」

(おや、おや。あなたたち何してんのかな?)

「は？何言つてんだテメエ？わけわかんねえこと言つてんじゃねえよ！邪魔すんじゃねえ！」

男の一人が怒鳴りつける。哀と歩美からだ逆光でシルエットしか見えない。？

「そうか、あつちの感覚で英語で言つちまった。え、いいから、その子たちから手を退ける。俺の知り合い何でな。」

男がそう言つて、ポケットにてをいれながら歩いてくる。

哀も歩美も頭の中で私達と知り合い？微かに聞き覚えのある声だが、見たことのないシルエット誰なの？と考える。

「哀、歩美、久しぶり！元気してたか？
明るく声をかけてくる。」

「この闇の世界へ連れていかれた天使、それを示す二つの点が俺をこの場にいざなつた。久々の再会をこんな汚い場所でさせたお前らを許すわけにはいかないぜ」

哀も歩美もこの男が誰なのか、このギザな言葉で理解する。

「工藤君！」

「コナン君！」

二人とも満面の笑みを浮かべて名を口にする。

そうこの男、4年ぶりに日本に帰国した名探偵：

工藤コナン！

「すぐ助けてやっから、安心して待つてる。」

二人に微笑んで言う。

すると目付きを変えて、5人に視線を向ける。

その今まで感じたことの内容な威圧にたじろぐが、5人ともコナンに突っ込んで来る。

「工藤君逃げて！」

「コナン君逃げて！」

さすがにコナンでも、5人をいつべんに相手するのは無理だと感じた二人は叫ぶ。

次の瞬間二人は目を疑う。コナンはサッカーボールも麻醉銃も使わず、5人に何もさせないうちに倒してしまった。

コナンは二人に近付きながら

「大丈夫か？二人とも。」

その声をかけるが、コナンが5人を倒したことに驚いて何も言わない。

そんな二人を不思議に思ったコナンが手を縛っていた縄をほどきながら、

「どうした？」と聞く。

我に帰った哀が問う。

「あ…あ…あなたどうして博士のメカも使わずにそんなに強いのでしょうか？」

ようやく我に帰った歩美もつんつんと頷く。

「ああ、そのことか」と言いながら、質問に答え始める。

「向こうで父さんの知り合いの空手家に空手教わって、近くに園子姉ちゃん家の別荘があって、たまたま京極さんに会ってちょうどいいと思ったから、別荘にいる間、毎日京極さんと組み手してたからかな。京極さんが言うには、俺の実力は、日本でも結構上位の力があるってさ。」

笑って言う。

「これで、大事な仲間をどんな奴からでも守りきれ。だろ？」

二人とも4年前より身長も伸び、身体も逞しくなったコナンを見て『ノカッコイイ。』と思いい頬を紅くして見惚れている。

コナンは携帯を取り出して警察に5人を連行してもらおうよう連絡す

第3話：指輪

三人はアメリカでの話などをしながら、阿笠宅に着く。阿笠宅に着き

「ただいま、博士。」

「哀君には会えたのか？」

と言って、リビングから顔を出しコナンの横に哀と歩美がいるのを見て微笑んだ。

四人はソファーに座り哀が淹れてくれたコーヒーを啜る。（歩美だけ紅茶）

「そういえば、コナン君どうして歩美達のいる場所わかったの？」

コナンは、コーヒーカップをテーブルに置き、上着のポケットから眼鏡を取り出して今も使っているが普段はコンタクトをつけていると話した。

そのあともいろいろと話し、気付いたらもう日が落ちていたので、歩美は帰っていった。

コナンは久々に哀の手料理を食べるため残り、ソファーで推理小説を読んでいる。キッチンから美味しそうな匂いが漂いはじめた頃、小説を閉じてキッチンに行く。

「今日の献立は？」

「シチューよ。味見する？」哀が夕食を作る横でそんなたわいない話をしながら夕食までの時間を過ごす。

夕食を食べ終え、何時間かたった。

コナンは読んでいた小説を閉じると、横に座って雑誌を読んでいる哀に渡したい物があるから、家に来いよと言って立ち上がる。

「…こんな時間に家に呼んで、いやらしいこと考えてるんじゃないでしょうね？」

「バ…バ…バ…！んなわけねえだろ！／＼」

哀はクスクス笑って、ほんとかしら？とコナンをからかう。そんな哀にコナンは顔を赤くしてムスツとした顔をする。

工藤邸

電気をつけると工藤邸の中は、コナンがいない間も哀が掃除してぐれていたらしく、綺麗になっている。

哀がふとリビングのテーブルに乗っている小さな箱に気付く。

哀が気付いたのに気付いたコナン

「お前に…プレゼント。／＼」

コナンが恥ずかしそうに言う。哀がテーブルに近付いて開けても良
いか聞くとコナンは頬を紅くして頷く。

哀が箱を開けると二つの指輪。

「…この片方を私に？」

コナンが頷く。

指輪の内側には、それぞれ K to A と A to K と刻まれている。

哀は嬉しくて、嬉しくて、ずっと会えなくて寂しかったのもあり、
気付いたらコナンに抱き付いていた。

コナンは、そんな哀に驚きつつも、ギュッと抱き締める。

「この四年間ずっとこうしたかった。／／」

「…私も。／／」

コナンは哀の顎を少し上にあげて、哀の唇に唇を重ねる。

「／／おかえり、工藤君。」昔だったら、絶対に見せなかったよう
な笑顔で言う。

「…ずっと…寂しかったんだから。」

少し潤んだ瞳で上目遣い。

「…カワイイー！！そんな顔してこんなこと言われたら、抱き上げて
ベッドに持って行きたくなっちまうじゃねえか！なんとか、ここは
抑える！いくら実年齢が24とはいえ、今は14、さすがにまだ早
い。」

そんなことを頭の中で考えていると哀がキスを求めてくる。今日は
随分可愛らしいと思いつながら、深く唇を重ねた。

第4話・教室（前書き）

坂口七海というオリジナルキャラが出ます。

第4話：教室

コナンが日本に帰って来てから数日が経ち、今日から新学期が始まるもちろん、コナンも哀達と同じ帝丹中学2年生として学校に通い始める

この春休みの間は、蘭やおっちゃん・服部に帰国の連絡をしたり、探偵団と遊んだりして過ごした

何故か新一の時とは違い、身長が伸びているので新しく学ランを新調したりもした

因みに身長は、中学2年になろうとしている時点で175cmだ

「工藤君、学校行くわよ。あなた転入生なんだから、職員室にあいさつしに行くんでしょ？だったら、少し早めに出ないと」

「わかってるって、そんな急かすなよ」
コナンは食パンを口に咥えて、頭を掻きながら玄関を出る

「あなた、またそれしか食べてないの？」
呆れたように哀は言う

「俺が朝弱い知ってたんだろ？そんな顔して言うなら、俺の分も朝飯作って、起こしに来てくれよ。」

ジト目で哀を見る

「い・や・よ。何で私が工藤君のためにそんなことまでしてあげなくちゃいけないのよ？」

(それじゃあ、まるで夫婦みたいじゃない／＼)

内心そんなことを考えている哀であった

あのあとから、工藤君は歩きながらずっと朝食と朝起こすよつにと頼んでくるので、結局私は受け入れてしまった

私達は、昇降口の前で別れて工藤君は職員室へ、私は新しいクラスを確認するため掲示板へと向かう

掲示板を見ていると後ろから声がかかる

「おはよう、哀ちゃん。何組だった？」

歩美が肩の上からひよっこり顔を除かせる

「歩美ちゃん、おはよう。私と歩美ちゃんはA組」

「やったあ！！また一緒だね。今年もよろしくね」

笑顔で抱き付く歩美

そんなとき、光彦と元太がやってきた

「御二人ともおはようございます」

「おーす」

「その様子だと、御二人はまた同じクラスだったみたいですね。僕達はどうでしたか？」

「残念だけど、今年は違うみたいよ。円谷君と工藤君はB組、小島君はC組よ」

「俺だけ一人かよお、つまんねえなあ。」

みんなとクラスが別れ不貞腐れる元太

「何言ってるんですか元太君。クラスが違うと言えど、隣りですし、友達には変わりないんですから、元気出してくださいよ」

「そうだよ元太君。私達ずっと友達でしょ」
二人が元太を慰めると元気を取り戻した

哀はそんな三人を親が子を見るように微笑んでいた

四人ともそれぞれの教室へと別れ、担任が来るのを待つ

B組

光彦が席に座っていると担任がガラツと扉を開けて入ってきた

「ほらっ、席につけー。俺がこのクラスを受け持つ鈴木だ。この一年よろしく」

鈴木はサッカー部の顧問をしている体育教師

「えーと、これから転入生を紹介する。日本人なんだが去年までアメリカに留学していたそうだ。じゃあ、工藤入ってくれ」

ガラツ

キヤー

「カツコイイノノ」

キヤー「超イケメンじゃんノノ」

コナンが教室に入るとそんな歓声が女生徒からあがる

男子生徒は、皆ムスツとした顔をする

「さつき先生も言っていたように、アメリカから転入してきた工藤コナンです。4年前まで帝丹小に通っていたんで、知ってる奴もいると思うけどよろしく」

コナンが自己紹介し終わると、鈴木がコナンの席は窓側の一番後ろと言い、コナンはそれに従い席につく

A組

担任の高杉（旧姓松本）先生が自己紹介をしていると隣のA組からキヤーキヤー歓声があがる
哀と歩美以外の生徒は、なんだなんだとぎわつく

（ハア、きつと工藤君が自己紹介でもしてるのね）

そんなことを哀が思っていると高杉が
「きつとコナン君ね。ほら、帝丹小出身の子なら知ってるでしょ？
あの子がB組に転入して来たのよ」

帝丹小出身の生徒はわかったような顔をしている

B組

HRを終えると騒がしくなり、教室を飛び出して行く生徒、友達と
会話する生徒などがいる

そして、たくさんの女子はコナンの席を囲む

だが、あまりにイケメンで大人っぽい雰囲気醸し出すコナンに、
緊張して話しかけられない

コナンはめんどくさそうな顔をして、質問を待つ

…待っても誰も口を開かないので、痺れを切らして先に口を開く

「なんか質問があんだろ？あるなら早くしてくれない？さすがにこの状況のままいられると困るんだけど？」

コナンの言葉を聞いて漸く質問し始める

身長や趣味、アメリカのどこに住んでたのかなどその他諸々

A組

HRを終えるとすぐに他クラスの生徒が入って来た

皆B組らしく、転入生とかイケメンとかそんな言葉を発している

哀と歩美が席に座り、話しているとサッカー部のマネージャーをしていて哀と歩美の友達の坂口七海が興奮してやってきて

(哀と歩美もサッカー部のマネージャー)

「歩美、哀！ヤバイヤバイ物凄いイケメンがうちのクラスに転入して来た！身長も高いし、ガタイも結構良くて、大人っぽい雰囲気だし、何よりもイケメン」

哀は興奮して話し終えた七海を見て溜息を吐いて呆れている

七海はそんな哀を見て不満顔をして歩美に訊く

「何なのよ、この哀の態度は？どーゆーこと？」

歩美は不満な態度を見せて訊いてくる七海に少し怯えつつ答える

「…コナン君のことでしょ？私達幼馴染だから知ってるよ。それに…哀、言っても良い？」

「…別に構わないけど」
哀は少し頬を赤く染めて俯く

七海は二人のやり取りを不思議そうに見ている

「えっとね…実は………」

「ええー！！哀の彼氏！？」

七海はあまりの驚きに大声をあげる

「／／／…ちょっと…大声出さないでよ！／／／」
恥ずかしそうに俯く

「…本当にいたんだ。あれだけ告られてるのにみんな振るから…哀には彼氏いるんじゃないかって、噂にはなってたけどそんな心配がないから、ただ恋愛に興味ないのかと思ってた」

七海は未だ驚きを隠し切れない顔をしている

「4年前のコナン君がアメリカ行く前に告白されたんだよね」

悪戯な笑みを浮かべて哀に言う

「ちょっと歩美ちゃん！／／／」顔を真っ赤にして歩美を睨む

歩美はえへへと笑っている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8194f/>

最強の名探偵

2010年10月21日22時37分発行